

6. 優生政策

6-1 産まなかった（産めなかった）理由 ～隔離政策による生殖の制限～

【問 10-1、問 10-1-1、問 10-1-1-1、聞き取り 10-2（一部聞き取り 10-1）】

療養所生活の年数を推定できた人のうち、8割強が40～69年間という長期間に及んでいる（単純集計 6）。また、入所時の年齢では、51.1%（370人）が10～19歳で、35.4%（256人）が20-29歳で入所したと答えている（単純集計 18）。大部分の入所者は生殖年齢期を療養所内で過ごしてきた。入所生活は、生殖年齢にある人びとの出産行動にどのような影響をあたえたのだろうか。

入所中に子どもを産ま（め）なかったと答えた人（男女）は95.1%（626人）、入所中に自分の子どもを産んだ人（男女）は4.9%（32人）であった（単純集計 42）。子どもを産ま（め）なかった理由については、「断種・墮胎・不妊手術」が49.0%（291人）、「園内結婚をしなかった」が23.2%（138人）、「たまたま妊娠しなかった」が8.8%（52人）、「ハンセン病を気にして妊娠しないように注意した」が6.1%（36人）などとなっている（単純集計 45）。外科的措置である断種、墮胎、不妊手術が産ま（め）なかった理由の半数を占めていることは、入所者の生殖制限に療養所が積極的役割を果たしたことを改めて裏付けており、医療機関としての責任が問われる。

6-1-1 断種・墮胎・不妊手術を受けた理由

「断種・墮胎・不妊手術」という理由を挙げた人たちの聞き取りでは、「産まないのが当然だった」「強制ではなかった」「常識だった」「仕方がなかった」といった説明が目立つ。

・そもそも患者どうしで結婚しても子供を産むというのがまちがっている。ここは療養所の内である。ここの中で結婚するのに夫が断種の手術をするのは当然のことだと思っている。（1938年入所 女性）

こうした、国立療養所において入所者同士が結婚し子供を持たないのは当然である、とする語りのなかで注目されるのは、「当然だった」という単純な肯定であると共に、その多くの場合が、「そう思うしかない」という別の理由を伴って語られていることである。以下では「強制的だった」という人も含めて、「断種・墮胎・不妊手術を受けた理由」として挙げられたものを概観してみよう。

結婚の条件

まず、断種が結婚の条件とされたことは多く語られており、このことは、生涯を療養所で暮らすことを予期せざるを得ない多くの入所者に、結婚生活という社会通常の営みを獲得するために断種が当然視されたことがうかがえる。

・結婚をする条件として、どちらかが手術をしないと、夫婦舎に入れてくれない。（1942年入所 男性）

・園内で結婚する為の条件だった。昭和40年でさえ断種が行われているような状況だった。(1960年入所 男性)

また断種はせずに、妻が妊娠したら墮胎というケースもあった。

・恵楓園では断種、不妊手術は強制ではなく妊娠したもののみ墮胎させられたが(自分は)経験はない。(1941年入所 女性)

それでは、社会通常の営みであるとはいえ、断種・墮胎という過酷な条件のもとでもなお結婚したいという切実な想いのなかには、療養所という環境に関連するところがあったのだろうか。これについて、以下のように、結婚したい切実な理由を、劣悪な居住環境からの脱出とする語りがある。

・昔乞食でもこんな暮らしはしないと思うほどみじめな夫婦生活であった。30畳に15人が暮らし、夜に夫が通って来るという生活をしていて。昭和25年頃、4畳半の部屋に入った。しきり一枚であったが夫婦生活が見られないということに救われたことか。その間の生活はなんとも言われない。思わず、万歳したほどであった。(1945年入所 女性)

・断種はしなきゃいけない感じが強く強制的であった。1週間位で良くなるから。結婚の理由は、雑居部屋から出たかったこと。自分達の生活をつくりたかった。(1948年入所 男性)

また、孤独を癒すために結婚した人もいる。

・あまり寂しくて結婚した。愛情とかよりも、すがりたくて結婚した。兄嫁に意地悪されて、療養所に入所しただけでもうれしかったし、死ぬ一歩手前であったから、(夫は)自分と結婚するために断種したので、大事にしなければと思っている。(1945年入所 女性)

生活への不安

・ここでは主に断種が行われていた。自分でももう働けないだし、子どもなんて産んだって育てるお金もないし、と、患者も当然のこのように手術を受けていたようだ。(1944年入所 男性)

・断種手術は強制ではなかった。自分たちは育てきれないので子供ができたなら困るという判断をした。一生療養所ですごすのだから、子どもがいても...という思いで簡単に手術をしてしまった。今思うとちょっとうかつだったと思う。(1951年入所 男性)

・妻が妊娠したので断種した。妻は墮胎手術を受けた。自分達は一応納得して受けたつもり。自分達の生活がいっぱいで育てる自信もなく、子供と会えないことなどを考えて。園

が悪いとは思っていない。強制されたとは思っていない。（1944年入所 男性）

このように、子どもを育てるための生活設計が立てられない状況にあるという認識で断念したという回答が目立った。

病気との関連

断種・墮胎・不妊手術を受けた理由として、病気との関連をあげている語りがある。ただ、そのなかにはあいまいな医学的な根拠を鵜呑みにしている場合もある。

・結婚を許可してもらうのには断種が条件になっている。結婚してもいいが、子どもを作ったら困るから断種するというのが習慣であり常識だった。半強制だった。男の手術の方が簡単だったので男が手術を受けた。自分の子どもにうつすわけにはいかないとも思った。子どもに病気が出たら大変なので断種はやむを得ない。危険を避けるのは当たり前。（1947年入所 女性）

・当時は、結婚の条件として当然のように受け止められていた。今現在もその条件付結婚は正しかったと思っている。確率的にハンセン病の者同士が性交を持てば、子供もそうなることは十分考えられる。また新たなハンセン者を出してどうするの？（1943年入所 女性）

・自分が母から感染したので、自分の子に感染させてはいけないと思い妻も同感だったと思う。（1947年入所 男性）

・女の場合、妊娠すると病気が再燃する確率が高いと聞いていた。自分たちはこうして妊娠もなくこうしている為、今、こうして生きておられるのかなあと思う。（1946年入所 女性）

・断種手術するのが結婚する条件だった。それが当然と思われていた。自分自身子どもを産もうとは思わなかった。子どもに染ったら困る。自分の子どもに自分のような苦しみを味あわせたくないから。（1939年入所 女性）

子どもを手放す不安

・子供が産まれても、診療所内では育てられないし、離ればなれで生活すれば、よりかわいそうだから、ここで生活する以上、2人でいた方が幸せだから、話し合いのうえ、夫が断種した。（1948年入所 女性）

・手術しない人で、子どもが生まれるとすぐに草津の療養所に子どもだけ強制的に送られてしまうので、そんなことになるくらいなら子どもは産まない方がいいと思った。（1947年入所 女性）

・草津は唯一、保育舎のある所であったが、幼児を入浴させながら水死させるという噂があった。そこで行きづまって先生に中絶手術を願い出た。6ヶ月ですでお腹の中で動いていた。自然墮胎にせず、切断して取り出した。夫の方は結婚するなら断種してからとの規則を犯したのがばれて断種手術を受け、夫婦並んで入院してしまった。（1942年入所 女性）

その他

・自分があまり望まれて生まれてきたとは思ってなかったため、元々、子どもを産む気持ちが全くなかった。（1950年入所 女性）

避妊を実践していた人もいるという。

・その断種手術のことですけれど私が結婚した昭和29年、昭和30年頃全然手術をしていない人もいます。それは夫婦で避妊が出来る、それが出来る人もいます。私みたいに手が不自由なものはそのようなことが出来ないから断種手術を受ける以外に方法はなかったから。私と同じ頃に結婚したものでも断種手術を受けなかったものを3、4人知っています。それは手が正常に近いからきちんと避妊が出来ていたからだと思います。（1944年入所 男性）

妊娠を自他共にタブー視する風潮もあった。

・子供を作る事は悪い事だとの印象しかなく、とにかく気をつけていた。子供ができたことが分かると、できるだけ外出を控え、隠れるように生活を行った。手術の日には無理やり足などに怪我をして怪我を見てもらいに行くと周囲にはうそつきながら、医者の方へ行っていた。（1957年入所 女性）

・妊娠し子どもができたことで何か犯罪人みたいになっていた。（1939年入所 女性）

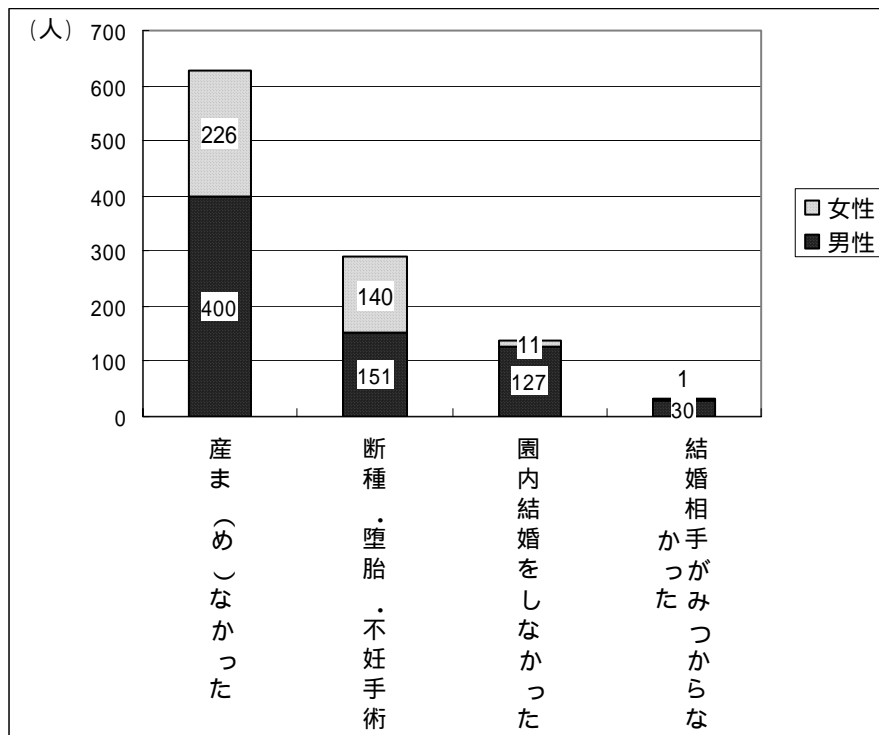
6-1-2 園内結婚をしなかった理由

一方、「園内結婚をしなかった」人のさらに詳しい理由としては、「結婚相手が見つからなかった」が26.1%（31人）、「療養所外に配偶者がいた」が20.2%（24人）、「ハンセン病にかかって子どもをつくるべきではないと思った」が5.0%（5人）、「断種や墮胎が嫌だった」、「治って退所してから結婚したかった」がいずれも4.2%（5人）となっている（単純集計46）。

入所者には男性が多く、男女比に偏りがあったことはよく知られている。本調査でもそれを反映しており、「産ま（め）なかった」と答えた人の男女比は、男性63.9%（400人）に対して女性36.1%（226人）であるが、その理由として「園内結婚をしなかった」と答えた人の男女比は男性92.0%（127人）に対して女性8.0%（11人）であった。さらに、園内結婚をしなかった人のうちの「結婚相手が見つからなかった」と答えたのは男性96.8%（30人）に対して女性3.2%（1人）である。「産ま（め）なかった」理由に「断種・墮胎・不妊手術」を挙げた人の男女比がほぼ等しいことを考えると、園内での男性の「結婚難」

が際だってみえる（図6-1-1）。

図6-1-1 産ま（め）なかった理由および園内結婚しなかった理由と男女比(N=626)



聞き取り欄には次のような記述がみられた。

・自分は当時（結婚適齢期）体の調子も悪かったし経済力もなかった。男の患者が多かったし、動物の世界でも強いオスがメスを支配する。自分にはそれだけの力がなかった。（1938年入所 男性）

・この病気は男女比 4：1 位に女が少なくてね...身体の不自由な男性は結婚できない人が多かったよ。私もおそくなって結婚したが、子どもをうめる年代ではなくなっていたよ。（1953年入所 男性）

また、園内結婚をしなかった理由に、配偶者を残して入所したことを挙げた 24 人のうち、20 人は 16～39 歳で入所しており、その多くが在園年数 20 年以上に及ぶ（表 6-1-2）。この場合にも長期にわたり配偶者と別れて生活したことが、出産行動に影響を与えたと推測される（表 6-1-2、表 6-1-3）。

表 6-1-2 療養所外の配偶者を理由に園内結婚をしなかった人の在園年数

在園年数	N=23	註1:「無回答」を除いて集計。
-19	3	
20-29	6	
30-39	2	
40-49	7	
50-59	5	

表 6-1-3 療養所外の配偶者を理由に園内結婚をしなかった人の入所年齢

入所年齢	N=24	註1:「無回答」を除いて集計。
-19	2	
20-29	7	
30-39	11	
40-49	3	
50-59	0	
60-	1	

ハンセン病患者が病気や生活不安などを理由に、自主的に産まない決心をすることもあろう。しかし、療養所では断種手術が結婚の条件にされるなど、産みたくとも産めない状況が前提として存在していた。また、園内結婚が許容されていたとはいえ、療養所内の男女比のアンバランスや療養所外に配偶者を残しながらの長期間にわたる療養所生活が、療養所内での結婚そのものを困難にしていたともいえる。療養所に隔離されること自体が、そうでない場合よりも生殖に制限が加えられることは言うまでもない。このようにハンセン病患者の隔離政策と優生政策の関係を検討する際には、園内結婚をした人の断種・墮胎だけでなく、療養所への隔離自体が生殖制限ひいては優生政策につながる点に留意する必要がある。

6-2 断種・墮胎・不妊手術の経験 【問 10-2、聞き取り 10-2】

断種・墮胎・不妊手術の被害は園内結婚しなかった人にもありうることを念頭に置く必要がある。本調査では断種・墮胎・不妊手術の経験について、園内結婚の経験の有無にかかわらず質問した。

男性の回答では、「園内結婚にあたり、断種手術を受けた」が 26.2%（117 人）、「女性が妊娠をして、断種手術を受けた」「上記の理由以外で、断種手術を受けた」が 11.2%（50 人）で、合計 37.4%（167 人）が断種手術の経験があると答えた。断種手術を「経験していない」と答えた男性は 62.6%（279 人）であった（単純集計 47）。

一方、女性の回答では、「妊娠をして、墮胎手術を受けた」が 18.2%（31 人）、「妊娠をして、墮胎手術を受け、不妊手術も受けた」が 11.2%（19 人）、「園内結婚をするにあたり、不妊手術を受けた」が 2.9%（5 人）、「上記以外の理由で、不妊手術を受けた」が 2.4%（4

人)で、墮胎や不妊手術の経験があると答えた人の合計は34.7%(59人)であった。また、墮胎や不妊手術を「経験していない」と答えた女性は65.3%(111人)であった(単純集計48)。

なお、断種・墮胎・不妊手術の被害を知るには、本人自身の経験はもとより、夫婦としてどうだったかを調べる必要がある。例えば、妻に墮胎や不妊手術の経験がなくとも、夫が断種手術を受けていれば、一組の夫婦として生殖制限が実行されたことになる。したがって本調査では、夫婦としての生殖制限の実態を知るために本人と配偶者両方の経験を質問した。

墮胎も不妊手術も「経験していない」と答えた女性のうちで、夫が「園内結婚をするにあたり、断種手術を受けた」と答えた人は39.6%(44人)であった。その他の理由によるものも含めると、「経験していない」女性の43.2%(49人)が、夫が断種手術を受けたとしている(図6-2-1)。一方、断種手術を受けたことのない男性で、妻が何らかの理由で墮胎か不妊手術、または両方をうけたと答えた人は合計8.2%(23人)であった(図6-2-2)。以上のことから、生殖制限を夫婦としてみた場合、妻が墮胎・不妊手術を経験していない場合でも、その夫が断種手術を受けていることが多い点に注意する必要があるだろう。

図6-2-1 妻が「経験していない」場合の夫の経験(N=97)

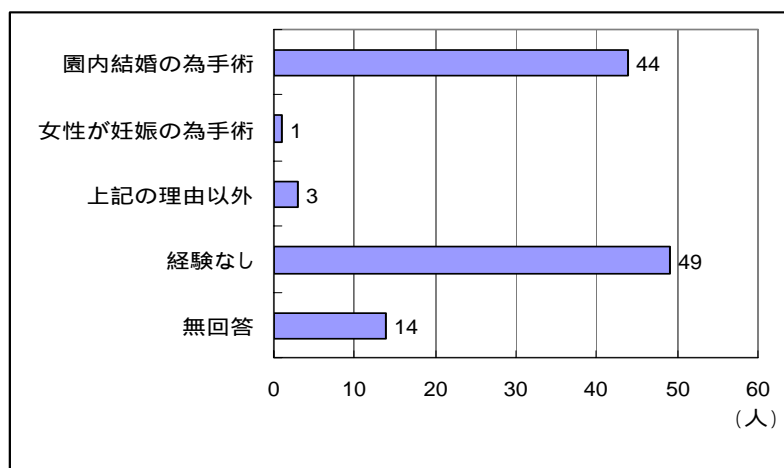
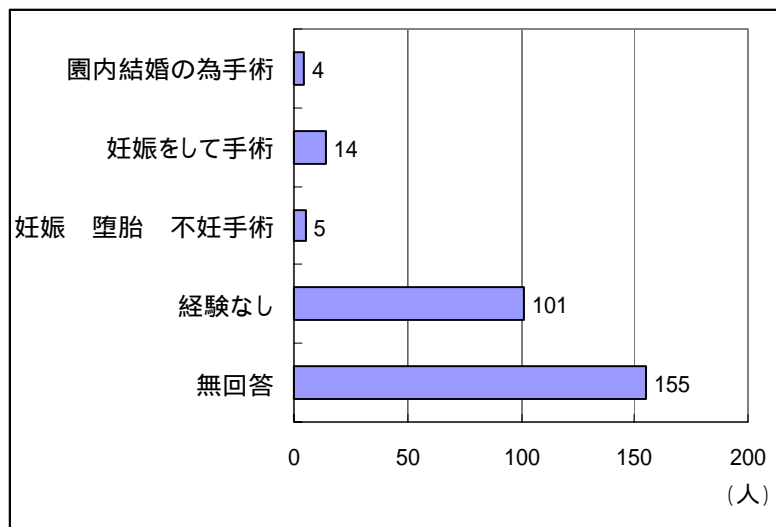


図 6-2-2 夫が「経験していない」場合の妻の経験（N=279）



また、断種、墮胎、不妊手術の経験について聞き取りをした。ご自身の経験や見聞きしたことについて以下のような回答があった。

（1）断種の経験

断種による屈辱感

断種手術は、男性入所者にとって人間としての自尊心を傷つけられた大変屈辱的な経験だったことがうかがわれる。

・若いときに手術されたので、はずかしい思いが忘れられない。その手術がいやで結婚しない人もいた。自分はもう当然という周囲の風潮があって、しかたがないことだと思って受けた。（1943年入所 男性）

・医師ではなく、看護の人間が断種を行った。「さん、先生より上手な人がやったからね」と言われた。医師がやらなかったと聞いて、ますます傷ついた。引っ張られるような感触と音が未だに忘れられず、他のことは許せてもこのことだけは許されなかった。（1941年入所 男性）

・子どもが好きだったので欲しかったが、周囲の反対が強かった。生活力もなく、産んでいたら子どもがかわいそうだったかもしれないので、結局はよかったと思う。ただ、断種については男として、人間として屈辱感があり、非常に抵抗感があった。（1950年入所 男性）

・手術よりも手術をするかどうかの身体検査が屈辱的なものであった。ペニスや睾丸を触られて、おまえは大丈夫そうだから手術が必要だと言われた。（1947年入所 男性）

特に断種手術の現場で性的に辱められたと感じている人も多い。

・外科の手術室で医師が不器用で30分もかかった。看護婦もいるし、足を上げたままで「恥ずかしい」し「みじめ」であった。一生忘れない！（1948年入所 男性）

・松丘保養園に附属の看護学校があり、看護学生十数人が手術時立ち会っていたので、若かった私ははずかしかった。（1941年入所 男性）

・昭和23年頃、外から看護学校の生徒が30人ぐらい愛生園の見学に来ていた。そのとき友人の断種手術があり、その様子を生徒30人が見て観察された。本人は若い娘が見ている前でとてもはずかしかった、ととても怒っていたが、当時は園に対しては何も言えない時代だった。（1947年入所 男性）

・妻の墮胎に責任を感じたのか夫は自ら断種希望。手術の日、何の通達もなくインターンにたくさん囲まれ「とてもはずかしかった」と話していた。（1947年入所 女性）

一般の病院でこのような経験をするのもつらいことだが、入所者の場合、生活の場でもある療養所の中で日常的に顔を合わせる看護婦（異性）にみられながら手術を受けたことは、大きな心理的負担となったと思われる。

男性が断種のターゲットとなったことに不満を漏らす人もいる。

・男ばかりが「断種」されていた。女が「不妊」手術をすればいいのに。（1949年入所 男性）

一方、「男性が断種の犠牲となった」という言い方に反発する女性もいる。

・その時代で結婚するにあたって、男が犠牲になったかの様に報じられているが、性欲のはけ口として女を見ているとしか思えない。納得して結婚したのではないのか。子どもがいたら、感染のことや、親のことで、一生そのことが気になってしまったのではないか。（1944年入所 女性）

断種による身体的苦痛

・麻酔もかけずに手術した。痛くて痛くて頭のシンまでこたえた。男として台無しだと思いき涙が出た。軍隊よりひどいと思った。（1949年入所 男性）

・手術は看護婦がした。手術を終わると、止血もしてくれず、出血のまま部屋に帰らされた。（1938年入所 男性）

・手術後痛いのでがに股で歩いて帰った。出血もしていた。その後、2ヶ月ぐらい四六時

中勃起していて大変だった。（1944年入所 男性）

・断種の手術を受け夫は症状が悪化したようだった。（1939年入所 女性）

・手術の際、細菌で感染してお腹が腫れた。その後夫は2~3日寝ていた。その経過について文句を言いたい。それは人間的にやってはいけないことである。（1939年入所 女性）

妻を思いやって断種

・結婚する人の断種手術はあたりまえだと何の疑問ももっていなかった。女が苦しい思いをするより、男がした方がよいと考えていた。規則だと思ってやった。（1942年入所 男性）

・結婚する条件としてどちらかが手術しないと夫婦舎に入れてくれない。女はもっと恥ずかしいので自分が断種をした。（1942年入所 男性）

・昭和33年結婚。その頃より前は「不妊」あるいは「断種」は強制だったが…。妊娠したら自分の責任で処置すればいいことになった。（産んでいいということではない。）そんなことできないので妻は若かったし、自分が「断種」手術を受けた。（1940年入所 男性）

子孫を残せないことの無念

・種の継続という点に関しては不本意で、怒りを感じる。生きた証がない！（1961年入所 男性）

・子孫がないということ。仕事が忙しいので、考えにふけていることはないが、小さい子を見ると、自分の孫は見られない、家系は途絶えたのだという思い。（1935年入所 男性）

・子どもを産んで育てていける環境ではなかった。医師から「幼児感染がしやすい」との話も出ていた。やむを得ない選択であった。「人」として思ってくれるのなら「子孫を残す」事のできなかつたこの気持ちを理解して欲しい。（1948年入所 男性）

・園内で結婚する場合は断種しなければならないと決まっていると知っていたので、仕方がないとあきらめたが、子孫を残せないのは人間として「情けない」と感じる。病気のことを知らない親戚からもなぜ子供を作らないのかと問いつめられたりして困った。子孫を残せなくてさみしいという気持ちはある。（1952年入所 男性）

自らは墮胎、不妊手術を経験していないが、夫が断種をしたこの女性は、「子孫」よりも「子ども」に思いをはせている。

・女として子供を生めなかつたことは悔いる。愛生園にも子供はいない。園の行事で地域

の子が入ってくるが、その子たちの肌に直接ふれてみたいと思う。（1956年入所 女性）

あからさまな断種の強制

・夫は、結婚に当って睾丸炎？（本人もよくわからないが）にかかって子種がなく断種の必要はないと主張したが、「やつらは聞かず」スジ切りされた。（1943年入所 女性）

・後の夫は初婚のときに手術をしていた。彼は逃げ回ったが、しまいにはせざるをえなかったと言っていた。（1941年入所 女性）

・当時の婦長に追いかけられ、断種しろと言われた。試験管に精子をいれてもってこいと言われたが、反発して持っていかなかった。（1955年入所 男性）

・結婚してから看護婦が毎日部屋に来て断種を強制的に行った。（1946年入所 女性）

・強制的に「断種」の手術をうけさせられた。痛い目にあわされたのだから慰謝料をもらいたい。その時、自分は園内を逃げ回っていたが、看護婦に見つげられた。（1949年入所 男性）

・情報が早く職員へ知れていたのか、結婚するかも知れないという関係の時から後をつけまわして説明も了解もなく有無を言わせずご主人が断種された。長島愛生園で。（1944年入所 女性）

懲罰的な断種の疑いも指摘されている。

・予防的処置であるはずの断種なのに、70歳近い夫婦に対しても断種をしていたので、罪として行っているのではないかと抗議した。（1941年入所 男性）

退所と断種

・退園の際に優生手術をするのは本当にひどいことだ。（1942年入所 男性）

・他者であるが、軽快退所をする際、断種手術を受けたようだ。（1954年入所 男性）

・昭和35年結婚したが、園の職員から言われて「断種」手術をしている。その2、3年後に園の職員から「社会復帰するか？」と聞かれ、本当に腹が立った。くやしさが残っている（1974年入所 男性）

断種をのがれた人びと

・戦後、断種しなくてもよくなってから、園内の人と結婚した。（1937年入所 男性）

・光田氏がやめてから昭和 38 年に結婚したのでパイプカットはせずに済んだ……。結婚の話を出すと、福祉課から呼び出しがあり、説明を受けたが医師からは私が「したくない」と言ったので認められた。また医師には「妊娠すれば早目に来い、考えてやる」と言われた。（1951 年入所 男性）

・宗教から断種は拒否し結婚を決意したときには脱走へ、となった。（1939 年入所 男性）

その他

時代の変化に理不尽さを感じた人もいる。

・「断種は当然のこと」という意識を持っていた。昭和 30 年代から、断種をしなくてもよくなり、少し納得いかない思いもした。（1945 年入所 男性）

断種手術という大きな代償を払いながらも妊娠・墮胎を経験した人もいた。

・夫が断種していたにもかかわらず妊娠したことに驚いたと同時に憤った。できた時には産みたいと思ったが、婦長から強く墮胎することをすすめられた。惜しかった。忘れられないこと。（1948 年入所 女性）

・園内結婚をする条件は断種手術を受けることであった。私の場合は、医師が、「お前は若いし、社会復帰することもあるだろうし、かわいそうだから」といってパイプカットではなく、しばる手術をしてくれた。（先生に恵まれた。）断種手術については、結婚出来るならという気持ちのほうが強かった。社会復帰して、相手の女が妊娠したが、話し合って墮ろした。子供を墮ろしたことは後悔している。（1948 年入所 男性）

（2）墮胎の経験

子どもを産めなかった無念さ

・入所時、3 年で治ると云われた。育てられないからと中絶、不妊にまでされた。あの時、産んでいれば人生は全くちがったものになっていたと悔む。（1953 年入所 女性）

・昭和 20 年結婚。夫の実家で生活する予定だったので、妊娠もした。ところが、夫が結核に罹患したため園を出られなくなり、子供は 5 ヶ月で墮胎せざるをえなかった。園内で育てることはできなかったため。中には赤ちゃんを妹さんに育ててもらって、その子が立派に成長して園を訪ねてきていた人もあり、母親の遺言を取りに来ていた人もあった。子供に名前をつけ、位牌も作った。あの子が生きていたら、今どの位かといつも思っていた。（1940 年入所 女性）

・もし、夫婦になるんだったらと条件はつけられてはいた。担当の看護婦に対して「人の子どもを殺したんだからあなたも死になさい」という人も。今でも家内はその話はしない。32 年間で、水子の供養をした。首里のお寺で、毎年。（1952 年入所 男性）

強制的な墮胎

・知り合いの女性は9ヶ月で墮胎させられた経験をもっている。いくら頼んでも出産は認めてもらえず、全身麻痺をかけられ墮胎させられた。また遺骨は郷里に送られたと聞かすが、今でも悩まれている。(1951年入所 男性)

・あの時代は、男と女が親しく話しをしていると(職員が)男を連れてって筋を切った。みんな切られた。筋切らなかつたら結婚はしないという約束をした。分からないうちに妊娠した女は無理やりに流産させられた。(1944年入所 女性)

・お腹が大きくなって療養所に入った女がいた。子供は墮胎させられる事は知っていたのだが、とても言えなかつた。その後しばらくしてその女は墮胎させられたのを恨み、実行した医師に切りかかったが失敗、ほどなく女は死んだ。(1953年入所 男性)

墮胎の場所

・妊娠しても産めないから、もしできても流産するようにしていた。そういう部屋があった。(1941年入所 女性)

・星塚敬愛園では自分は病棟の付き添いをしていたので、病棟の個室で墮胎、不妊の手術を見たり、聞いたりしたことはある。(1938年入所 男性)

園の外で墮胎することもあった。

・断種しない人は市内で墮胎していた。(1949年入所 男性)

・ハンセン病について頭にしみついた思いがあるから、子どもができた時にはヤミで掻爬した。何回か。絶対赤ちゃんを生んだらいけないと思った。当時、断種は強制ではなかつた。うつろという印象を与えられとつたから、兄弟の子も抱けなかつた。男として子孫を残すことは有頂天になることだろうが、仕方なかつた。(1957年入所 男性)

墮胎による母体への危険

・2回目の時は、出血がひどく、もうだめかと思った。1ヶ月以上入院したが栄養を摂るため着物を売って、魚をわけてもらった。(1941年入所 女性)

・3回妊娠した。医師の処置が悪かつたのかなかおりなかつた。(1941年入所 男性)

墮胎につづく断種や不妊手術

・結婚後、2回墮胎をさしてしまい、周囲のすすめもあり断種を余儀なくされた。また、妻の体をこれ以上痛めさせてもいかんから...(1957年入所 男性)

・昭和27年頃、妊娠3ヶ月で墮胎させられ、隣のベッドで夫が断種手術させられた。理由は女の不妊手術より男の方が治療が楽ということだった。医師が筋を切れとせまった。（1949年入所 女性）

墮胎時に無断で不妊手術をされた人もいる。

・今の主人との間に子供が出来たのが分かった。子供が出来た時、病気が騒ぎ出し、大島に行けば産めるが、たった1人の家族である母が「帰って来なくなるから行ってくれるな」と言われ、そのまま7ヶ月にまでなった。7ヶ月の時、帝王切開にて墮ろした。この時私の了解も何も得ないまま、知らないうちに子供が産めないように結ばれていた。この時は強い怒りを覚えた。帝王切開をする前にまず、結んでいいか、本人に了解を得るべきだと思う。（1951年入所 女性）

生きて産まれた子

・自分たちは注意して妊娠しないようにしたが、周囲には8ヶ月になって中断した人もあった。看護婦が生きてる子を殺すのは辛い、その処置があった日、また次の日は気持ちが落ち込む（産声が忘れられない）と言っていた。（1952年入所 男性）

・7ヶ月で強制墮胎。生きて産まれたので殺された。だから産んだことになる。（1930年入所 女性）

（3）墮胎児のゆくえ

・手術場で避妊手術をした後、3~4ヶ月の胎児が膿盆に入れており新聞紙に包んで火葬場に持って行った。びっくりした。（1949年入所 男性）

・南静園で患者さんのつきそいをしている時に、処置をされて2~3日入院した人達を見たことがある。墮胎後の子供の埋められた場所も見ることがある。（1948年入所 男性）

胎児の標本の存在も知られていた。

・同郷出身の女性の子の嬰兒標本が標本室にあった。（1944年入所 男性）

・墮胎されて30年後医局に行くとホルマリン漬けの我が子と、知り合いの子供の2体が目に入る。後で、その知りあいの人にもホルマリン漬けの子供が医局にあったことを話し、2人で泣いた。（1942年入所 女性）

6-3 出産の経験とその理由

本章の冒頭で述べたように、入所中に自分の子どもを産んだ人（男女）は4.9%（32人）であった（単純集計42）。ただし出産や子どもの養育の経緯はさまざまであり、墮胎や断

種を同時に経験している人も多い。また、子どもが殺されたという人もいる。

自分で育てた

・結婚のため脱走し大阪で生活する。指を他者に気付かれないように気にしながらの生活は大変であったが、無事に3人の子供を育てることができた。（1939年入所 男性）

身内が育てた

・19歳の入所の時に同じ入所している男性と知り合い、結婚の許しをもらうため郷里へ一時帰省後、妊娠していることが分かったが、職員は見てみぬふりをしてくれた。出産するため夫とともに郷里へ、その後は昭和23年の強制収容まで子供3人と生活、強制収容後は、保育所へ預けられる。小学校にあがる前に両親のもとへ預ける。（1942年入所 女性）

・最初の子どもは流産させた。その後、断種の手術を受けたが、手術そのものが失敗だったため第1子・2子が誕生した。第1子は、療養所で出産し、療養所の職員の家で養育した。第2子を身ごもった際に妻の生まれ故郷へ。妻の姉がいっしょに面倒を見るとのことで、第1子も連れていった。その時は、一時帰宅ということで許可された。しかし、その後は療養所に戻ってくることはなく、連絡も途絶えた。その後、離婚。（1942年入所 男性）

施設に預けた

・妊娠に気づいたのは時間がたってからで、自分はおろすつもりでいたが、配偶者が欲しいということで生んだ。生まれて来る子供が、自分のように苦しむのではないかと思うと辛いから。子供を産むなら園から出ると言われたりした。出産後20時間で離された。乳児院、施設には毎週のように会いに行っていた。小、中の時の夏、冬は園に1～2週間泊ったりしていた。今は一般的な家庭生活をしている。（1947年入所 女性）

・昭和13年、帰省願いを出して、そのまま無断退所した。園で知り合った夫と2人で。昭和15年、子供が生まれました。しかし、昭和18年、再入所したときは、未感染児童として療養所の保育所に入れられ、自由に会うことができませんでした。子供が4歳になったとき、夫の母がつれていってしまいました。その後は、会っておりません。再入所して、夫が断種を受けました。（1930年入所 女性）

亡くなった・殺された

・断種したはずなのになぜか妊娠し、気がついた時は、4ヶ月をすぎていた。人工掻爬すると母体が持たないと言われて、6ヶ月で産ませた。両親は産ませてやると言ってくれたが、田舎で育てさせるにはかわいそうだし、自分自身(妻)は育てる自信がないから生まれた子供がかわいそうだといっていた。出産後割箸にガーゼを巻きつけて砂糖水を吸わせた。毛皮に湯タンポを入れてあたためたが、12時間後自然に息絶えた。（1941年入所 男性）

・結婚した段階では夫も自分も手術は受けていなかった。子供がほしかったので妊娠した

ことをひたかくしにしていたが、夫が妊娠のことで、家族に説明にいていた時期に、狙われたように呼ばれて、強制墮胎された。ちょっと来なさいと言われた。墮胎というより出産。ばたばたしていた。赤ちゃんの髪の毛は真っ黒。生きていた。鼻と口を押さえられ殺された。眼科の医者が手術。夫は帰ってきたとき、断種の手術を強制的に受けさせられた。絶望の日々だった。手術はすすめられたが断った。（1930年入所 女性）

・断種手術を受けたのだが、妻が妊娠した。女の子が産まれたが、注射を打たれて殺された。その後再び妻が妊娠し、園外で男の子を産んだ。園では育ててはいけないということで、園の外で育てたが、ハンセン病の子ということで、何度も引越しをした。（1955年入所 男性）

その他

・療養所で知り合った人と、退所後結婚、5回妊娠した。初めての子は周りから言われて墮胎した。2回目のとき、本病との事で相談相手がほしくて、医師に相談したところ、すぐに駿河療養所に連絡され、夫や療養所の医師から責められた。カルテには朱書でライと記入された。大きな病院にかかれず、小さな産科だったため、お産が重く、周産期障害でろう障害が残った。三回目、四回目は無事出産、五回目のとき、心不全といわれ、母体がもたないとの事で墮胎した。（1955年入所 女性）

・戦争で墮胎の機械が焼けたためおろせなかった。モクマオウの木の下の特タンぶきの家だった。お腹が痛かったので便所にいこうとして子供は草の上でうまれた。（1938年入所 女性）

・同施設で知り合った女性と結婚した。子供が出来たがかくしていた。流産の話も出たが時期が過ぎていた。子供ができたなら、二人とも愛楽園にいることはできなかったの、那覇に出て産んだ。（1948年入所 男性）

6-4 「未感染児童」の断種 【聞き取り 10-3】

2003年6月25日に邑久光明園で行われた検証会議において、公開聞き取りの質疑応答を踏まえて、いわゆる「未感染児童」が断種された可能性について検証すべきであるという意見が委員から提出された。その結果、この問題を被害実態調査の質問項目にとりいれることになった。なお、「未感染児童」という呼び名については、患者の子どもというだけで、いずれハンセン病に感染し発病する存在と決めつけている、という批判がある。本報告の記述においては、当時の文脈にならぬこの呼称を用いるが、「未感染児童」とカッコ付きで表記することとする。

「聞き取り 10-3」では、「未感染児童」が療養所から出るときに「断種」や「不妊」の手術をされたということを見聞きしたことがあるか、という質問をした。「聞いたことがない」「知らない」という回答が大多数であったが、中には可能性を示唆する回答もあった。

・保育所に入っていた子ども（男児）に断種の手術をしていて、外に出て結婚しても子ども

もができないという話を聞いたことがある。（1938年入所 女性）

・噂として聞いて欲しい。18歳になると療養所から出すが、その前に仲良くなっていて出すときに男に断種して出したということだ。昭和28年以前の話らしい。戦後だと思うが…。その男は「一生愛生園を恨む」と言っていると聞いた。「愛生園の保育所から出て行った連中は、ほとんど子どもがない」といった噂を聞いた。（1949年入所 男性）

・（聞いたことが）ある。感染していない子どもも多かった。断種や不妊の手術をされたという話を、自分より前に入った多くの人たちから、何回も聞かされた。（1960年入所 男性）

一方、「（きいたことは）ない。自分の子どもは出産している」（大島青松園 1951年入所 女性）「知らない。聞いたこともない。敬愛園で結婚し子どもは無事に産まれた。自分の子どもは断種されなかった」（大島青松園 1944年入所 男性）という回答もわずかながらあった。